

白中雑口把覧 (ザックバラン) No. 34

～ 白沢中の”今”を、ご覧ください ～

発行 令和2年12月1日

校長の白沢学その28 「長太夫橋」

橋に関するもう一つ、『続かたりつぐ白沢むかしばなし』の中に『ちようだゆうばし長太夫橋』の話が載っています。

「おい。また橋が流されるぞう。」

今から三百年近く前、川場街道が東入りから沼田へ向かう人たちで賑にぎわっていた頃のことじゃ。川場との境のあたりに、小さな木の橋がかかっておった。いつもはのどかな古語父の里じゃが、ここんどこ幾日も雨が降り続いて、村人たちは気が気じゃねえ。川の水はどんどん増え続けて、今にも橋にとどきそうだ。

「こう雨が降るたんびに橋が流されちまうんでは、わしらの暮らしが成り立たねえ。なんとかならねえもんか。」

「この橋がなくなっちまったら、沼田に行くにも遠回りしなくちゃなんねえし、荷物を運んでいくにも帰るまでに日が暮れっちまう。」

「まったく、どうにかならねんもんか。」

降り続く雨の中、今にも流されそうな橋を眺めて、村人たちは悔しくてたまらなかつた。

さて、この橋を見下ろす高台に、長太夫という名主さまがおった。立派なお屋敷に住んでいて、いつも村人の暮らしぶりを見ておったんじゃが、みんなの困っている様子を見て、そりゃあ心を痛めてなあ、なんとか頑丈な橋を造って村人たちを救ってやりたいと思いなさったんじゃ。そこで村人たちの中から山歩きに強い男を選んで、橋を造るための石を探してくるように言いつけたんじゃ。男たちは毎日ほうぼうの山を探し回っていたが、十日ほどたった日の夕方のことじゃ、孫兵衛という男が、息を切らせて駆け込んできた。

「長太夫さま、薬師岳たためいわの豊岩のあたりに、そりゃあ～いい石がみつかりました。」という。夜が明けるのを待って駆けつけてみると、まあ何豊敷きもあるような大石があっちこちにあり、朝日にキラキラ輝いていたそうじゃ。

さっそく橋造りの準備にかかってな、山の上で橋の形に石を切り出したんだが、今度はこれを運び出さなくちゃあなんねえ。村じゅうの人の手で、何十日もかかってな、大きな松の木を大石の下に差し込んで少しずつ少しずつ引き出し、ようやく里まで運んできたんじゃ。あんまり大きな石だったんで、途中の小山なんぞは形の変わってしまったところもあったほどじゃった。

そのような苦労が実り、長太夫さまや村人たちの願いがかなって、立派な石橋ができあがった。もう雨が降って水が出てもびくともしないし、人々が安心してこ橋を行き来することができるようになった。村人たちは何もかも長太夫さまのお陰だと喜び合い、それからは誰言うともなく「長太夫橋」と呼ぶようになったんじゃ。

そののち、長い月日が経って村の様子は変わっても、長太夫さまをたた称える気持

ちは村人たちの心に残っていてな、このあたりのことを「長太夫」と呼んでいたとも言われ、ゆかりのものも大切に残されているそうじゃ。長太夫さまは、きっと今でも村人たちを見守ってくださっていることじゃろうな。



↑ 下古語父にある現在の長太夫橋 ↑



前号で紹介した、クリーンパーク白沢の入口にある石は、ちょっと離れていますが、もしかしたら長太夫橋の一部が残されているのかもしれないと思いつつ長太夫橋の取材に行くと・・・。上の写真のように、昔の長太夫橋は、現在の長太夫橋の 袂 に置かれていました。全くの別物でした。

【秋の風物詩 落ち葉掃き】

